

安らかに眠れ

南フランスのピレネー山脈^(一)のふもとに太古の昔から一風変わった小さな市場町があった。そこでは年月とともに住民たちの生と死が繰り返されている。しかし、老人が若い頃の話で孫たちを楽しませたくても、彼の記憶するかぎり具体的に示すことのできるような変化が町では何世代も起こっていなかった。曲がりくねった狭い通りに並んだオンボロの家々は互いに前のめりになって、まるで時間つぶしでもするかのように、何年も前に見たことについて噂話をヒソヒソとやっているように見える。住民たちでさえ自分の住まいの特徴である古めかしさに気づかぬうちに同化してしまい、のんびりした夢心地の状態——自分が生きている進歩的な時代の精神とはまったく相容れない状態で——毎日をおこなっていた。

荷馬車が通る音もめったに聞こえない道路——古い敷石の割れ

ジョージ・ギッシング(作)
松岡光治(訳)

目に雑草がはびこっている道路——を歩いていると、いきなり中世の時代^(二)に連れ戻されたような、そんな錯覚に襲われる。突然、ラブレ^(三)の物語に出てくる修道士たちやフロアサール^(四)の年代記に登場する騎士たちに出くわしたとしても、なんら不思議ではない。そうした人たちがいても、周囲の雰囲気と完全に調和してしまうからである。こういった田舎町の素朴な人々の生活は、あくせくした外の世界の生活と大いに異なっている。もよりの町でさえ連絡をとる手段がほとんどないのだが、今から語られることになる事件が実際に起こった五十年前は、言うまでもなく、もっとひどい状態であった。

夏と冬、種まき時と収穫期、それぞれが順番にやって来ては去って行ったが、いつも住民たちの頭は土地を耕す男や牛飼いや羊飼いにありがちな、尽きることのない心配事ではいっばいだっ

た。従つて、ジャック・シューテット^(五)が営む宿屋の酒場に毎晩のように集まる連中も、穀物の値段や家畜の病気を除いては、自分が偉そうに発言できる新しい話題を持ち合わせていなかった。だが、ちょうどその当時、突然、よほどんだ水たまりのような田舎者たちの知識欲を根底からかき立て、長きにわたつて尽きることのない情報源を提供することになる事件が発生した。

それは南部地方に特有の天気がいよいよ夏の日の夕方の遅い時刻——西の空に日没後の夕陽の光がまだ残っている時刻——の出来事であつた。あちこちの窓に明かりがきらめき始め、たいいていの人たちは自宅でくつろぎ、家事の後始末をしたり、そろそろ寝ようかと考えていた。しかし、ジャック・シューテットの宿屋の前にあるベンチでは、客がまだ何人か帰らずに残っており、喉の渴きをいやしきれていない者たちや、会話を盛り上げてくれそうな事件でも起こらぬものかと、かすかな望みを抱いている者たちがいた。ところが、今晚は、後者の男たちが失望の憂き目にあうことはなかつた。というのも、ほとんどの客が仕方なく腰を上げ、お休みの挨拶を交わそうとしていた、まさにそのときガタガタと走つてくる馬車の車輪の異様な音が、通りの端から聞こえてきたからである。その音は次第に近づき、客たちがびくりして、亭主が大喜びしたことに、一台の馬車——明らかに貸馬車だつた——が宿屋の正面で停まつた。

「亭主はいるかい？」と馬車の御者が叫んで言った。

「ああ、何の用だね？」と、亭主のジャックは馬車の扉へ走り寄つて返事をした。

「御婦人が今晚お部屋をご所望だ。満足いただけられるようにな！」それから御者は運転席から降りながら言った。「オレも今晚はここに泊まるぜ。馬を小屋に入れて面倒をみてやってくれ。明日の朝は四時に出発するんで、馬具をつけて何もかも準備しとくように馬番に伝えてくれよな。朝食までにD——町に戻らにゃならんのだから」

御者が言ったのは十マイル離れた小さな町のことだつた。

「で、御婦人は？ 一緒に戻りなさるんで？」

「いいえ」という声が馬車の中から聞こえた。「少しの間ここに逗留します」

お出ましぶりから判断して、間違ひなく上客だと踏んで大喜びしたジャックが馬車の扉を開けると、長くて黒い外套にすっぽり身を包み、顔をベールでおおつた背の高い女性がさつと降り立つた。

「手前どものおもてなしに必ずや満足いただけましよう」と、ジャックは宿屋の亭主らしく自信たつぷりに答えた。そして、御婦人を宿屋の二階へ案内し、こぎれいな小さい部屋に通した。

「さぞかし空腹を覚えておいででしょうな」とジャックは言っ

て、二本のローソクに火をともしながら、御婦人の顔をチラッと見ようとしたが、それはできなかつた。「ほんの数分で、お食事の準備はできますよ」

「ありがたい。でも何もいりません」というのが彼女の返事だつた。「御者には必要なことを全部してやりなさい。私はすぐ床に就きますから、もう下がりなさい」

ジャックはもつと話をしたり、上客の顔を見るために、その場にもつと留まりたかつたのだが、彼女の口調がそうした機会を与えてくれなかつた。彼女の話し方は命令することに慣れた人の話し方だつたのである。それで宿屋の亭主は低くお辞儀してから退室した。

ジャックが一階の酒場へ降りてくると、そこでは大興奮が渦巻いていた。馬車の到着を目にした町の連中が大挙してやって来ていただけでなく、けたたましい車輪の音にびつくりした隣人たちも大勢そこに来ていたからである。みんな御者を取り巻くようにして集まり、この新たな来客について様々な質問を一齐に投げかけていた。ジャックが降りてきたとき、ちょうど御者が少し怒つたような口調で質問に対する最終的な答弁を行つてゐるところだつた。

「だから、もう一度お前らに言うけど、御婦人のことは何も知らんのだから、いろいろオレに質問したつて無駄つてもんだ。あ

の方は他の旅行者と同じようにD——町の青鐘亭^{グリーン・フル}亭まで大型の馬車でいらして、隣町まで行く馬車をお求めになつたつてわけよ。自分でおつしやつてるように、しばらくここに滞在されるつてんなら、お前らも好奇心を満たすチャンスがあるうつてもんじゃないか」

ちょうどその瞬間にジャックが酒場に入つてきた。彼は集まつてゐる人間の多さに気づくと偉そうな態度をとつた。

「これこれ、みんなの衆、そんな男のことはほつときな。御婦人がオレの宿屋にいらつしやり、オレが自分で話をして注文を承つただけで十分じゃねえか。今はお前らと話をする時間はねえし、大つびらにオレのお客さんについて根掘り葉掘り尋ねるなんぞ、身分不相応つてもんだぞ」

それから御者に向かつて、「あんたの食事は二、三分で準備が整いますぜ。部屋に案内させてもらいやしよ」

それで、みんなの根も葉もない話がまたぞろ自由に飛び交ひ、宿屋の亭主の威厳ある叱責など、どこ吹く風と聞き流されてしまつた。この話題によつて最終的に、あんぐりと口を開けて驚く者、おずおずと自分の考えを口にする者、独断的な主張をする者といった具合に、集まつた連中は性格に従つてそれぞれ色分けされた。いろんなことが当てずっぽうで言われ、村一番の物知りでさえ自分が知つてゐる中で一番有名なフランス貴族の名前を何の

ためらいもなく言う始末だった。疑い深い連中は笑い飛ばしてから、あの謎めいた客はどこか裕福な農場主の娘で、ちょっと気まぐれに田舎を見なくなったにすぎないと思っっているような素振りを見せ、この謎めいた問題も朝になれば夜霧のように消え去るはずだと言いつ張った。

議論は遅い時刻まで続いたが、ジャック自身は客たちに近寄ろうとしなかった。せきたてられて実は何も知らないことがばれるのを恐れていたに違いない。とうとう、何も分からないという事実を除いて、議論からは何の結論も引き出せないことが判明したので、うわさ話も一つずつ消え始め、真夜中になる頃には酒場も明かりが消えて静かになった。

翌朝は日の出の直後に、通りに沿った住人たちはゴツゴツした敷石の上を通ってD——町へ戻る馬車のガタガタという音で目がさめた。昨晩の議論を蒸し返すのに何か必要だったとしたら、これこそその機会を与えるものだった。宿屋の亭主ジャックが姿を現して、朝のバイブをくゆらせながら、開いたばかりの酒場の前を歩きだすと、たちまち取り囲まれて質問攻めにあつた。

ジャックが依然として口を閉じたまま、もったいぶった態度をとり続けていたため、町の者たちも推測によってしか、好奇心という内なる欲求を満たすことができなかつた。「あれが謎の客のいる部屋だぞ」と、ジャックが二階の窓を指差したので、みんな

の好奇の目がそちらに向けられた。だが、どんなに詳しく調べてみても、何一つ変わったところは見られない。明らかに、こうした場合になし得る唯一のことは、時が経過して御婦人みずからによって謎が解き明かされるまで待つということであった。ところが、御婦人は一向に起きてくる気配がない。太陽が昇って、ずいぶんしてからジャックは自分の娘をやつて部屋扉をノックさせ、朝食をとられる気があるのかどうか尋ねさせたが、娘は何の返事ももらえなかつた。こんなに長く寝るとは長旅で疲れておられるからだ——ジャックはそう考えて自分を慰めた。しかし、とうとう正午近くになった。彼は娘に再びノックさせたが、またも反応がない。どうすることもできないではないか。午後になつたので、ジャックは隣人たちを相談のために呼び集めようと考えた。全員的一致した考えは、無理にでも部屋に入ってみるのが宿屋の亭主としての務めだというものだった。ジャック・シユールテットは宿屋の亭主といえども普通の人間にすぎなかつたので、みんなと同じ好奇心に駆り立てられ、その決定を受け容れた。ジャックは決定に従つて扉をこじ開け、選ばれた多くの友だちと一緒に部屋の中へ入つて行つた。

目の前の光景を見て、みんな驚きのあまり二歩、三歩と後ろへたじろいだ。ベッドの外側には豪華な結婚衣裳のようなものを着た女性が倒れているではないか。両手首には高価な宝石をちりば

めたブレスレットがはめられ、ネックレスもまたすべて宝石でできているように見えた。彼女はシンプルだが高価そうな作りのヘッド・ドレス⁽⁶⁾を身につけ、その頭の上には顔からはね上げられた優美な織物のベールがかぶさっていた。この光景は遠くから見てもまばゆいばかりだったので、部屋に入った者たちは驚きで言葉を失い、じつと突っ立つことしかできなかった。しばらくして、みんなで近づいて彼女の顔を眺めたが、ものすごい美しさだった。だが、両方の頬には血の気が残っておらず、わずかに開いた唇は微動だにせず、広い額は大理石のように白く、冷たかった。死んでいたのである。どうやって死んだのかについてはすぐ明らかになった。毒⁽⁷⁾が入っていると分かる小さなビンが右手で強く握られていたからだ。発見者たちは互いに顔を見合わせたか、その顔は亡骸と同じように真っ青になっていた。最初に沈黙を破ったのはジャックだった。

「みなの人衆、これは一体どういうことだ？」

みんな黙ったまま首を横に振った。馬鹿げた話などしている場合ではない。ほとんど間髪を入れず全員が部屋を調べてみることを思いついた。引出し付きの書き物机の上には、金貨の詰まった大きな財布が、さらに横には鉛筆で書かれたメモがあった。

「みなさん、これをお読みになる時には、私はもう存在していないでしょう。私の素性を知らうとなさらないでください。私の

過去を知っても気がふさぐだけです。みなさんにお願したいのは、このままの姿で私を埋葬していただくことだけです。お財布の中にお金が入っていますから、それでお葬式の代金を払ってください。みなさんに幸せが訪れるように、残りのお金はすべて差し上げます」

それから二日後、この小さな町では前代未聞の大きな葬式が執り行われた。「お嬢さま」——この見知らぬ女性はそう呼ばれていた——の埋葬式への出席をみんなが望んでいた。うるわしき御婦人の非業の死に対して、純情な人々の目に涙が止めどなくあふれた。彼女の埋葬地では四つの支柱の上に飾り気のない墓石が置かれ、その墓石には十字架と例の「R・I・P」⁽⁸⁾という文字が刻まれていた。

* * * * *

謎の「お嬢さま」が埋葬された日から十二年が経過した。埋葬される前の十二年と同様に、それは村の外観にほとんど何の変化ももたらすことのない時の経過であった。少ないながらも変化があったとすれば、それは主に老朽という名の変化である。より目に見える形で変化が現れたのはもちろん住民たちであった。多くの人々が亡くなり、多くの人が生まれ、当時は子供だった者たちも

今では大人になっていたが、新しい世代といっても本質的には古い世代と変わりはなく、信じることも信じないことも昔と同じ、風俗習慣も日々の話題も昔と大差がなかった。尋常ならざる事件などめつたにない平穏な地域社会では、そうした事件がたまたま起こると、当然のことだが、その鮮明な記憶が長く保たれるものである。人々が最終的に好奇心を満たされて飽きてしまい、事件そのものの新奇な魅力がなくなってもなお、それは先祖伝来の家宝のように受け継がれる話となる。かの麗人の謎めいた話の場合もまたしかり。ずいぶん昔のことになるが、村の物知り連中が独創的なアイデアを駆使し、この謎を解こうとしたが駄目だった。今でも、その謎は何でも不思議がる子供たちに語って聞かせるには又とない話であり、我らがジャック・シューテットのようには実際に「お嬢さま」を見たことがある人たちにとつては、いつでも大きな顔をして、もつたいぶつて話ができる情報源となっている。

「お嬢さま」の小さな埋葬地には、生えればかりの草が青々と茂っていて、古い樹木の横に張り出した枝の葉が涼しそうな心地よい木陰を作っている。(九) 墓石が一番まばらな埋葬地の隅っこでは、大勢の子供たちが騒々しく遊びながら、長い夏の日の午後を過ごしていた。子供たちからそう遠く離れてはいなかったが、外の道路に通じている教会墓地の木製の門の両脇には低い石が置

かれていて、その一つに若い女性が座っていた。ひざの上の何か縫い物に顔を向けていたかと思うと、次の瞬間には両手を下し、嬉しそうな顔で子供たちの群れをじっと見ていた。彼女は宿屋の亭主ジャックの娘である。今では結婚して子供も生まれていた。彼女は死体で発見された御婦人の部屋の扉をノックしに父から二階へやられた朝のことを今でもよく憶えていて、その時の恐怖について子供たちに話して聞かせるのが好きだった。子供たちは彼女のことをナネットと呼んでいたが、彼女を囲んでおしゃべりするために、いつも喜んで近所の家々からやって来ていた。

遊びに夢中の子供たちに囲まれて草の上に座っているのがナネットの娘で、まだ三歳にもなっていない。母親は急に縫い物を脇に置くと、騒がしい群れの中の一人に向かって叫んだ。

「イライザ、娘を抱っこして私の所につれて来てちょうだい！
怪我をしちやいそうだから」

イライザは言われたとおり幼子を両腕で抱きかかえて運び、お母さんのひざの上に座らせた。彼女がその子を愛撫してから遊び仲間の方へ戻ろうとした、ちょうどそのとき小さな門が開いて、一人の男が教会墓地に入ってきた。背が高く、しゃきつとした人物で、顔以外に年をとっていると思わせるような所は全然なかった。しかし、顔はシワだらけで、やつれていて、短いあごひげには白い毛がぎっしりと交じっていた。

この男は不安げな疲れた表情を目に漂わせ、落ち着かない様子で周囲を見ていた。背中には小さな合切袋ウツレットを担ぎ、手には杖を持っていたが、それは体を支えるためのものとは思えなかった。ナネットとイライザは男が教会墓地を横切っている小道に沿って歩くのを見ていたが、彼は二人のすぐ近くまで来ると、草むらの方へ向きを変え、四つの石柱に支えられた大きな平たい墓石に疲れたように腰を下ろした。それから、合切袋を降ろして開けると、中からパンを取り出して食べ始めた。この墓石を座席として選んだのは、多分きれいだったからであろう。周囲の墓石はどれも草の葉におおわれるか、雑草が生い茂っていたのだ。一方、彼が選んだ墓石は見るからに古そうだったが、誰かの手によって十分な世話がなされ、きちんと清掃されていた。

男がパンを食べ始めると、すぐ子供たちが彼のことに気づき、遊ぶのを突然やめて、急いでナネットの所に走ってきた。

「ナネット、ナネット！」と、子供たちはみんな一緒に大声で言った。「見て！あの老人、お嬢さまの墓石に座ってるよ。あっちへ行ってくれて、言った方がいいんじゃない？あそこは誰も座っちゃいけないんだから」

ナネットはしばらく迷っているように見えた。

「まあ、みんな」と、彼女はしばらくして答えた。「そういう失礼なこと、言っちゃ駄目よ。でも、イライザ、あの方の所に行っ

て、その墓石には座ってほしくないって、みんなが思ってることを伝えてくれないかしら？」

イライザは命令を実行しに走って行った。そして男の前に立ち、やや震えるような声でナネットの言葉をそのまま伝えた。最初は悲しげな目で見つめられて怖かったが、彼女が話し終わった時には彼の口元に笑みがこぼれていたので、その恐怖もたちまち消え去った。

「で、どうしてまた誰にもここに座ってほしくないのかね、お嬢ちゃん？」と男は尋ねたが、イライザは黙っていた。彼は墓石から立ち上がると、そこに刻まれている碑文を探したが、十字架と「R・I・P」という文字しか見えなかった。「ここには誰が埋葬されているのかな？」

イライザは答えたくないみたいだった。「長い話になるわよ」と、彼女はしばらくしてから答えた。「ナネットの所へ来てちょうだい。すべて知ってるから話してくれるわ」

こう言われて、見知らぬ男は好奇心を幾分そそられたように見えた。彼は食べ物で合切袋に戻し、子供のあとに続いてナネットの所へ行った。若い母親は彼が近づいてくるのを目にすると、ほんの少し顔を赤らめ、彼が目の前に来てお辞儀をしたので、それに応えるべく立ち上がった。男はイライザの巻き毛の茶髪に手を置いて話しかけてきた。

「この子の話では、私が座つてた墓石には、それにまつわる話
が何かあるそうだね。迷惑でなければ、話してくれないかい？」

見知らぬ男の声が朗々として音量も豊かだったので、ナネット
はその語調に驚いて顔を上げた。その素晴らしい声の質は彼の風
采と不思議なコントラストをなしているように思えた。

彼女は慎み深く答えた。「喜んでお話ししましょう。この辺
りでは見慣れぬ方なのですが、村の者なら皆よく知ってる話な
んです」

男は何も言わずにうなずき、ナネットの向かい側にあつた墓石
に腰を下ろした。すぐに彼女は前に語られたことを同じように話
しだした。聞き手も初めのうちは普通の好奇心しか示さなかつた
が、話が進むにつれて不安を覚え始めたようである。ちょうどナ
ネットが御婦人の豪華絢爛たるドレスの説明をしていた時のこと
だったが、彼は急に立ち上がつて苦痛の叫び声をあげた。びつこ
りして相手の顔をじつと見つめていたナネットは、その顔が死人
のように真つ青になっているのに気づいた。男はほとんど立って
おれないような感じで、しばらく躊躇していたかと思うと、また
墓石に座つた。

「ご加減でも悪いんでしょうか？」と、ナネットがあわてて尋
ねた。

彼は質問を聞いているようには見え、両手で顔をおおつたま

ま座っていたが、すぐさま低い悲しげな声がかから漏れ出た。周
りに集まつていた子供たちは怯^{おそ}えたように互いに顔を見合わせ、
物問いたげにナネットを見たが、誰ひとり口をきく子はいなかつ
た。すると、突然、見知らぬ男はあわただしく墓石から立ち上
り、まるで眠りから覚めたばかりであるかのように不思議な、虚
ろな目つきで辺りを見回した。それから不意にナネットの方を向
いて話しかけたが、何を言っているのか全然理解できないほど取
り乱している様子であつた。

「その宿屋はどこ？ どこかね？ 宿屋の亭主はまだ生きてる
のかい？」

「ジャック・シューテットはまだ生きてますよ」と答えたナネッ
トの声も、驚きと不安とで震えていた。「私はその娘です」

彼は返答の後半部分に注意を払わず、彼女の近くまで行って腕
を強くつかんだので、彼女は叫び声を上げずにおれなかつた。そ
れで彼はしゃがれた声で「そこに案内してくれないかね？」とさ
さやいた。ナネットは言われたとおりにし、宿屋に向かつて足早
に歩き始めた。子供たちも二人のあとに続き、おそろおそろの見知
らぬ男の顔を見上げたり、ひとつ走りして彼女の援助のために誰
か連れてこようかといつたような、訴えかけるような表情でナ
ネットの顔を見たりした。

みんなが宿屋に到着すると、ジャック老人はいつもの場所に

た。扉の前のベンチに座って煙草をくゆらせていたのだが、最初は娘が宿屋に客を連れてきたと思い、一行を迎えるために嬉しそうに立ち上がった。

「父さん、この方が話をしたいそうよ」とナネットは言った。そして、群がる子供たちの方を振り返り、みんなをまた遊びに戻し、彼女自身は苦しい状況から救い出されたかのように、幼児を連れて自分の家の方に向かった。

「内々で話ができるかね？」と見知らぬ男が言った。

ジャックは「いいですとも」と答え、向きを変えて家の中へ入ったが、その態度には自分自身の威厳だけでなく相手を意識した清廉さも表れていた。

二人は酒場の小さな特別室で一緒に腰を下ろした。見知らぬ男はジャックが申し出た軽い飲食物を固辞し、先ほど少し耳にした話をすぐまた持ち出し、その話が本当かどうか尋ねた。宿屋の亭主は見るからに興奮している客に驚いたものの、得意になって話せる機会が訪れたことを喜び、もったいぶった態度で例の謎めいた事の顛末を詳しく説明してやった。

「で、これは十二年前のことなんだね？」と男は尋ねた。

「ひっきり十二年前のことです。あん時はナネットもまだ八歳の小娘じゃったが、今じゃもう二十歳ですぜ」

「で、服をすべて着せたままで埋葬したんだね？ お墓をあば

いてもらわんといかんな」

ジャックは驚きで口をぽかんと開けたまま、男の顔を穴の開くほど見つめていた。ぶつ魂消るようなことを聞いて、彼は畏敬の念を抱いたほどである。二人はしばらく黙ったまま互いに向き合っていたが、やがて見知らぬ男が「彼女のものは何も保管してないのかい？」と熱心に尋ねてきた。

男のこのような態度に抵抗できず、ジャックはしばし考えてから答えた。「ええ、一つありますぜ——ですが、あの方をしのぶ縁にするためだけでして、値打ちがあるからじゃねえんで。両手には指輪が二つ付いてましてね。あつしらが一ついただけやした」

「私に見せろ」と男が出し抜けに言ったので、その奇妙な言動にジャック老人は面食らってしまい、相手の命令口調に腹を立てることさえ思いつかなかった。ジャックは完全に当惑した面持ちで部屋を出て行き、すぐさま小さな指輪を持って戻ってきた。指輪にはシンプルな宝石が埋め込まれており、繊細な図案文字（十二）が何か刻まれていた。すると、男は指輪を持ったまま、突如として両手で顔をおおって泣きだした。

ジャックの困惑ぶりは今やピークに達した。自分がパイプを落としたことにハツとして気づくまでに数分かかったほどだ。このちよつとした出来事でジャックは理性を取り戻した。その出来事

が彼の注意を見知らぬ男からそらし、高ぶっていた神経を和らげる結果となったのである。彼は体を曲げるのに苦労しつつ——年を取るとともに腹の脂肪も増えていたのだ——壊れたパイプを憂い顔で拾い上げ、バラバラになった宝物のパイプを名残惜しそうに見ていた。そして、彼が見るのをやめた頃には、見知らぬ男も話ができるくらいには気を静めていた。

「私の奇妙な行動にさぞかし驚いただろうね」と、彼は悲しげな低い声で言った。「君には説明をしなきゃならんな。もし聞いてくれる時間があるなら、すぐに謎を解いて、君の心を軽くしてやるよ」

ジャックは時間を取られる緊急のこともなかったので、いくらか解こうとしても絶対に解けなかった謎が、これから氷解するのかもしれないと思ふと嬉しかった。彼はベンチに座り、相手にも腰かけるように指差して待っていたが、この時までには好奇心を丸出しにして自分の威厳を損なうことがないように細心の注意を払うようになっていた。見知らぬ男はしばらく黙したのち話し始めた。

* * * * *

私の名前は言わないでおこう。その必要もないし、語らずにいた方が多分よからう。私の出自は由緒あるフランス貴族で、その

貴族の称号を父の死によって受け継ぎ、この町から五十マイルほど離れた所にある大きな地所も手に入れたと言えは十分だ。父が亡くなると、私にとって肉親は弟だけとなったが、この弟はプライドの高い横柄な野心家で、私とは正反対の性格だった。父は私に早く結婚してほしいとよく言っていたけど、私は研究に没頭していたから、妻や子供を持つことで余計な責任や心配を我が身に招きたくないと思っていたんだ。父の家名を継承したとき、私はすでに三十に近かった。ずっと学問に励み、世間からほとんど完全に隔離された生活をしていあって、独身のまま跡継ぎもなく死んでしまい、称号も地所も弟に残す可能性が、つまり弟を大喜びさせる可能性が十分にあつたから、突如として私が妻をめとるつもりだと言いだした時の弟の怒りようときたら、それはもう大変だった。

自分でも予期せぬことに、そんな尋常ならざる決意をする気になったのは、次のような事情のためだった。よく私は地所を取り囲んでいる森林で長い時間ひとり散策をしたものだ。時にはのんきに自然を楽しんだり、時には自分の考えに昼の間ずっと没頭したり、夜は夜でどこかの宿屋——それがいい場合は、お金を払えば喜んで夜露をのがせてくれる小作人の住まい——くらい見つかると思っていて、何日も家を空けたものだった。

ある日のこと、たまたま私はいつもより遠くまで歩き回り、日

没になったので一晩泊まる場所はないものかと探し始めたんだが、自分がどこにいるのか皆目わからなくなっていた。とはいへ、これは大した問題じゃなかった。歩き続けていると、ほどなく道端に建っている——他の住まいからは少し距離がある——小さな田舎屋にたどり着いたからだ。ちょうど太陽が沈んだところだったんで、その晩はこの田舎屋に泊めてもらえらるだろうと思ひ、私は中へ入ってみた。遠慮せずに入ったのだが、部屋にいたのが夕飯の準備に精を出している若い娘ひとりだけだったから、少し気まずい思いをしたよ。彼女はとても質素な服装で、それはどちらかと言えば普通の小作人の娘の服よりも粗末だった。私の足音に気づいて振り返った彼女の顔は、それはもう美しく、あれほど美しい顔は見たことがないね。

「お父さんなの？」と、彼女は振り向きながら言ったけど、目の前に見知らぬ男がいたので、すぐさま最高に魅力的な微笑を浮かべて、自分の勘違いを謝ってくれた。といっても、田舎者のぎこちなさやきまり悪さは微塵も感じられなかったけどね。

「失礼しました。お父さんの帰りを待っていたので、その足音かと思っただけです。お父さんに何か御用でしょうか？」

私は彼女に迷惑をかけることになった理由を説明し、父親が帰ってくるまで家の中で待ってもよいかと尋ねた。すぐに許可してくれたので私は腰を下ろし、彼女はそのまま夕飯の準備を続け

てくれたよ。部屋をあちこち動きながら、何か火にかけて料理をせつせとしていた彼女の姿に、私は目を奪われてしまったね。彼女の一挙手一投足はそれはもう優美そのもので、時おり彼女から言葉をかけられると、私は自分が小作人の台所というより伯爵夫人の客間にいるような気がした。要するに、すっかり心を奪われてしまい、どんなに魅力的な女性に対しても絶対に動かされたいと思っていた自分の心が、一瞬のうちに、今まで経験したことのない恋こがれる気持ちでいっぱいになったのさ。

「愛するのにふさわしい女性をやつと見つけたぞ」と私は心の中で思っただよ。それで、彼女の前に姿を現してから十五分もしないうちに、もし彼女が望むなら、私は妻にしようかと心に決めたんだ。君はこれが理解できないほど非現実的な決心で、私のような地位にある人間にとつては思慮のない決心と思うだろうが、ちゃんと私という人間を理解してくれないといけないよ。私は同じ階級の者たちが強く執着している生活上のしきたりには反感を抱いていて、そうした自分をむしろ誇りに思っていたのだから。それに、私は楽天的な性格なんで、何事にも縛られずに判断して行動する自分に対し、いつも最高の結果を期待していたのだからね。

ほどなく父親が帰ってきた。屈強な体つきで親切そうな顔をした愛想のよい男で、すぐ分かったことだけど、普通の小作人には見られないほどの知性を備えていたよ。私を心から歓待してく

れ、相手が行き暮れた旅人だと分かるとすぐに、ためらうことなく夕食と一晚のベッドを提供してくれた。また、私が宿泊代を払おうとすると、自分は宿屋をやっているわけじゃないと答えて固辞したが、そこには誇りのようなものが感じとれたね。私は一日中ずっと歩き通したんで疲れてたけど、新しい友だちのもてなしに何の不足もなかったし、実際とても楽しかったので、この親子と一緒にいただけなら、どんな粗末な食事でも、美味しいと思っただろう。この小作人の娘は——名前はメアリアンだと分かったが——食事中は私の向かい側に座っていたから、その美しい顔から目をそらすのは無理なことだった。一度だけ彼女は私の視線に気づいたみたいで、私と目が合うと、ほんの少しだが頬にパツと赤味がさしたよ。みんなで楽しく会話しながら夕べを過ごし、私は退室したくなかったんだが、小作人は簡素な生活習慣のためか早めに腰を上げ、私を寝室に案内してくれた。

翌朝は早く起き、私は彼らと一緒に同じ一つの料理を食べてから、出立の意志を伝えた。前の晩にほめかされた警告もあって、あえて宿泊の支払いを父親に申し出ることにはしなかったが、この道を次に通る時は——心ひそかに思ったように、すぐそうするつもりだったんだけど——喜んで旧交を温めることにすると彼らに確約した。この二人の友だちには自分の名前をすでに教えていたので、彼らは私との会話できまり悪さを感じることもなく、

いつでも私を大歓迎すると言ってくれたよ。

それから二週間もしないうちに私は彼らを再訪し、心から歓迎してもらった。だから、メアリアンに対しても父親に対しても、気にかけていた話題にはあえて触れず、すでに私たちの間に芽生えていた友情と親交を深めることだけに力を注いだんだ。そのあとも私は数ヶ月にわたって小さな田舎屋をたびたび訪れた。そうして、ある日とうとうメアリアンと二人だけになったとき、自分が頻繁にやって来ていた理由を思い切って告白したんだ。彼女もすでに気づいていたらしく、ためらうことなく——まったく謙虚にはあつたけど——私が完全に彼女の心を射止めてしまったことを認めてくれたよ。これを聞いて私の喜びが頂点に達したことは言うまでもない。それで、私は二人の間に起こったことを父親に直ちに告げ、娘さんと結婚させてくださいと頼むつもりだとメアリアンに言ったんだ。そして、仕事から帰ってくる途中の父親を迎えに行き、この問題をすぐ彼に持ち出したのさ。彼は最初とても驚いた様子だった。私は自分の名前と階級を言えば、それだけ簡単に同意を得ることができると思っていたんだけど、丁重ながらも断固たる口調で拒絶されてしまったよ。だから、彼と一緒に田舎屋へ戻る道すがら、私は彼の翻意を促そうとした。私たちが帰宅すると、父が固辞したという事実がメアリアンに伝えられたが、私がどこの誰であるか分かると、彼女自身も自分を是非と

も妻にしようとしている私を思いとどまらせようとした。そのことが彼女にどれほど苦痛を与えているのか、私にもよく分かったよ。

しかしながら、私は執拗に食い下がった。称号なんか私にとつては何の価値もないこと、今は完全に人目を避けて生活していること、メアリアンを失うなら絶対もう結婚はしない覚悟でいることなどを申し立てた結果、私は不承不承ながらも彼女から同意を得ることができた。それで、来るべき結婚のことを弟に知らせたんだが、彼の不満がいかにひどいものであったかはすぐに分かったよ。とはいえ、弟が野心のあまり強硬手段に出てくるなんて想像もしてなかった。結局、私たちの結婚の立会人は弟とメアリアンの父親だけで、結婚は極秘で行なわれることになったんだ。あの恐ろしい夜のことを君にどうやって説明したらいいだろうか？ 思い出すたびに体が震えるし、他人に話さなきゃならないなんて想像したこともないけど、できるだけ簡潔に話してみよう。

結婚式は肅然と執り行われた。私がメアリアンに花嫁らしいドレスを着るように主張していたので、一緒に王女様のように祭壇まで歩く姿を見た時は、思わずうっとり見とれてしまった。だけど、実際に結婚して幸せの絶頂に達したと思った、ちょうどそのとき私はこの上なく辛い悲哀を味わいそうになっていったんだ。というのは、弟が自分の野心にとつて脅威となる危険をなんとして

も避けんがため、私に対して残酷な策略をめぐらし、それが成功してしまっただからね。私の召使いの一人が——あとで彼女は計画のすべてを打ち明けてくれたんだけど——弟から袖の下をもらって説き伏せられ、結婚式当日の晩に花嫁を少し離れた所へ引っぱって行き、実は自分自身が妻であること、今回の結婚の話を開かされた時に脅迫によって私から沈黙を強いられたこと、今度は自分が意趣返しとして秘密をばらすのだといったような、とんでもない嘘をでっち上げていたんだ。

弟はメアリアンの純真さを利用して陰謀を企ていたので、かわいそうに彼女は疑うこともなく、この恐ろしい話を本当だと思いい、すぐ逃げ出してしまった。ほどなく私は彼女がいけないことに気づき、夜を徹して探しまくった——が、それは徒労に終わったよ。私は苦悶のあまり翌日は物すごい熱病にうなされてしまった。人生に絶望してしまい、生きるのがいやになって、体の回復を望まなくなってしまったのさ。とはいえ、まだ妻を取り戻す希望は捨てていなかった。それで、体力が回復するや、彼女の捜索に出かけたんだ。

捜索時の問い合わせは無駄足を踏むばかりだったので、絶望した私はあとに何を残していくことになるのか、これから将来どんな生活を送ることになるのか、そんなことはまったく構わずに故郷を離れた。これ以上は君に話す必要もなからう——その後は

ずっと地上をさすらう放浪者になったんだ。一ヶ月前にフランスへ戻ってくると、今では弟が私の称号と財産を保有しているという噂を耳にした——野望がなくなって弟も嬉しいに違いない。君は私のことを気が狂っていると思うだろうね。他の人であれば、私みたいに無鉄砲なことにはせず、もっと賢明に行動していただろうか。多分そうだろう。私はいつも他の人とは違っていたからなら。やり方が、それから、ありがたいことに、望むものがね。

* * * * *

ここで見知らぬ男は話をやめて腰を上げた。彼はもう一度小さな墓地を通り抜け、もう一度「お嬢さま」の墓石の前で立ち止まった。それから、溜息をつくとき、その場を立ち去ってしまった。それ以後もう二度と彼の噂を聞くことはなかった。

【訳注】

(一) 眼下に広がるピレネー山脈の美観はギッシングのお気に入りだった。死ぬ直前にギッシングは保養のためにピレネー山脈の麓にあるフランス南西端の海辺の町サン・ジャン・ド・リューズ (St.-Jean-de-Luz) に行き、最後は健康によい気候を求めて同じ山麓にあるイスプール (Ispeure) へ移ったが、心筋炎 (myocarditis) が原因で一九〇三年二月二十八日午後一

時一五分に息を引き取った。

(二) 西ローマ帝国滅亡からルネサンスの前まで、文化の発展が停滞したヨーロッパの中世は一般に「暗黒時代」と呼ばれる。

(三) フランスの作家ラブレール (François Rabalais, 1494?-1553) は弁護士の末子として生まれ、修道士となつて哲学・神学を学びながらも古代文化への情熱を燃やし、中世の遺産を引き継いでルネサンスの散文文学を開花させた。「ガルガンチュアとパンタグリュエルの物語」(Gargantua et Pantagruel, 1534-64) はフランス・ルネサンスの最盛期を代表する傑作である。

(四) ジャン・フロワサル (Jean Froissart, 1337?-1405?) はフランスの年代記作家。一三二二年から一四〇〇年までの百年戦争前半部を扱った全四巻の『年代記』(Chroniques) は、十四世紀におけるイングランドとフランスにおける騎士道文化を記した傑作と評価されている。

(五) シューテット (Choutelet) は「キャベツ頭」の意。

(六) 帽子のように被ったり、リボン・花・櫛などのように付ける頭の装飾品で、しばしば地位や職業を示す。

(七) ヴィクトリア朝の服毒自殺の手段としては、医薬品としても使われ、殺鼠剤 (ratsbane) など身近で使用されていた砒素 (arsenic) が多かった。また、月経の際の鎮痛剤として阿片チンキ (laudanum) が幅広く処方されており、女性の自殺によく使用されていた。

(八) 「安らかに眠れ」の意。R.I.P. [Le requiescat in pace]; May he [she] rest in peace!

(九) イギリスの古い教会の墓地で鬱蒼と茂っているのはイチイの木 (yew) が多い。イチイは常緑樹で寿命が長くて長持ちすることから節操と信仰を表すが、死の象徴でもあることから、これを家に持ち込むのは縁起が

悪いとされる。

(十) 合切袋 (wallet) は旅人・巡礼・乞食などが細々した携帯品いっさいを入れるための口紐がついた布製の袋のこと。

(十一) アルファベットを二文字またはそれ以上組み合わせさせて作った文字 (通例、氏名の頭文字を組み合わせたものが多い)。

【作品の解説】

本邦初訳。本篇は George Gissing, *Sins of the Fathers and Other Tales* (Chicago: Pascal Covici, 1924) に収められた四つの短篇の一つで、原題は “R.I.P.” (Rest in Peace)。

ギッシング (George Gissing, 1857-1903) は、マンチェスターのオーエンズ・カレッジで秀才の誉れ高い貧乏学生として孤独な下宿生活を送っていた時に肉欲に負け、年下の街の女 (Marianne Helen Harrison, a.k.a. Nell, 1858-88) と関係を持ったが、やがて彼女のために大学の更衣室で学友の金を盗むようになり、一八七六年三月三十一日に逮捕されて有望な古典学者としての将来を棒にふるってしまった。この時の事件は強迫観念となつて常に彼を不安に陥れ、その後の彼の作品において特にセックス、金、階級の問題に大きな影響を及ぼすことになる。この事件のあと彼の母親は息子をアメリカへ逃がしてやったが、国外追放の身となつたギッシングは『ポストン・コモンウェルス』紙 (一〇月二八日号) に絵画展の記事を書いた最初の地ポストンでも、一二月に臨時の高校教員になつた近隣の町ウォルサム (Waltham) でも、その後の根なし草のような人

生を暗示するかのよう長居することはなかった。そして翌年三月一日、十九歳になつていてギッシングは授業のある教室に現れず、そのまま姿をくらませてしまった。故郷のネルから帰国を願う手紙をもらつていたにもかかわらず、彼は勤務校で一つ年下の女生徒 (Martha Barnes) と親密な関係になつていたので、彼の一連の作品から判断すると、貧困と肉欲による一年前の犯罪のために自分は教養ある中産階級の女性には受け入れてもらえないと思つたことが逃亡の理由だと考えられる。

ギッシングが逃亡した先はシカゴであつた。その時の悲惨な状況は代表作『三文文士』 (*New Grub Street*, 1891) の二八章で売れない小説家ウェルブデイル (Wheelpdale) のシカゴ体験を通してリアルに語られている。シカゴに着いた時の所持金は五ドルだけで、一週間分の下宿代を払うと残りが半ドルになつたので、ギッシングは飛び込みで入つた『シカゴ・トリビューン』紙の主筆に頼んで英国の生活についての短篇小説を書かせてもらうことにした。残りの金でペンとインクと紙を買つた彼は、みずばらしい下宿の休憩室で騒々しい男たちに囲まれながらも、初めての短篇小説『父の罪』 (“The Sins of the Fathers”) を二日足らずで書き上げた。それは『シカゴ・トリビューン』紙の主筆の気に入り、一八七七年三月一〇日の土曜増刊号に掲載され、謝礼として十八ドルが彼の手に入った。この短篇に続いて同紙の三月三十一日号に掲載された第二作目が本篇「安らかに眠れ」である。

「父の罪」は教養ある中産階級の若者が貧しい街の女らしき労働者階級の娘に同情して恋に落ちるといふ作者自身の経験に基づいたものである。父に反対された主人公はアメリカに渡り、高校教師をしている間に父の嘘の手紙で婚約者が死んだと知らされるが、生徒の一人と結婚して幸せな生活を送っていると死んだはずの婚約者が現れ、最後は彼女に

よって氷結した川に引きずり込まれて無理心中を強いられる。本篇「安らかに眠れ」も、フランスの貴族が小作人の娘と恋に落ちて結婚し、その貴族の弟の遺産相続をめぐる悪巧みにだまされた娘が家を飛び出して自殺するという話で、不幸な結末となる身分違いの結婚が「父の罪」と共通するテーマとして劇的に描かれている。このテーマは、家長制の既成のパラダイムが女性を二者択一の商品であるかのように（家庭の天使）と（堕ちた女）という二つのカテゴリーに分類していたヴィクトリア朝の格差社会の中で、若気の至りとはいえ学生時代に肉欲ゆえに街の女と関係を持って犯罪に手を染めることで将来の夢がついえたギッシンクの運命論的な悲観主義から生れたものである。